

男女共同参画シリーズ その3

育児男子2019 ～育児休業と子連れ出勤～

Parenting Engineer 2019 - paternity leave and commuting with child -

1 はじめに

私は、1995年に日本工営（株）に入社し、環境調査・環境アセスメントの業務に携わっている。技術士の取得は2005年で、近年は管理技術者として、業務の全体とりまとめを行うことが多い。

2012年に東京から岩手県盛岡市に転勤した後、結婚して第1子が産まれたのは2017年4月。その後約8カ月の育児休業を取得した。そして、妻の第2子の妊娠を機に、私が会社の託児所に子供を預けるために、いわゆる子連れ出勤を行った。

実際に比較的長期の育児休業の取得や子連れ出勤を行うまで、どのようなプロセスを経たか、自身の経験を紹介する。

2 育児休業と子連れ出勤

(1) 育児休業の取得まで

私が育児休業を取得しようと考え始めたのは、2016年末、妊娠3～4カ月の頃、盛岡から再び東京への転勤の可能性が示唆されたタイミングであった。出産予定日は5月だったので、初めての出産・育児で非常に不安なところに、妻にとっては全く知らない土地での新生活が重なること等が理由である。

会社に対しては、2017年1月の安定期に入ったタイミングで出産の予定と育児休業を取得したい旨を伝え、そのための事前調整を開始した。特に翌年度から開始となる業務の営業・提案活動において、5月から育児休業取得を予定している自分ができるようなスタンスで臨むべきか、という点についての議論が中心となった。

表1 育児休業取得までのスケジュール

2016年	
9月	第1子妊娠
12月	育休取得を考え始める
2017年	
1月	会社に育休取得希望を表明
4月	盛岡から東京に異動（単身赴任）
4月22日	第1子誕生
5月	育休取得に向け引継ぎ開始
6月	育休取得（盛岡）
2018年	
1月	引越（盛岡→東京）・育休復帰
10月	第2子妊娠
11月	子連れ出勤開始

男性の場合、育児休業の取得が可能となるのは、法律上・会社の制度上とも出産後であるため、4月1日に東京に異動してから出産までの間は、男性の場合は育児休業が取得できないので、臨月の妻を盛岡に残し、私は単身赴任する形をとった。

出産後は、育児休業の取得に向けての社内・社外への様々な対応を行った。というのも出産前の準備はあくまで育児休業取得を想定した事前の準備であり、出産予定日を念頭に調整するものの、実際に育休に入る時期については、子供が生まれないと確定しない。そのため、育休取得に伴う実際の引継ぎについては、出産後に開始することにしたためである。

(2) 東京での子連れ出勤

2018年秋、妻が第2子を妊娠した。それまで第1子は、自宅で妻が育児に専念していたが、“つわり”等で、母子育児の活動範囲が制限されるようになった。そこで、会社内の託児所に子供を預けることとした。託児所は九段下にある会社の敷地内にあり、出張・残業がない日の始業前の8時に登園し終業後18時頃に降園した。

会社の託児所を利用する際の最大の心配事は、満員電車での往復であった。しかも、私が利用しているのは、混雑率ランキングが日本ワースト1の東京メトロ東西線である。そのため、利用開始前の1週間、いろいろな時間帯、車両位置等で実際に乗ってみて、どの時間・位置なら大丈夫か？というのを確認して、登園時間を決定した。実際にやってみると、子供が大人しかったこともあり、東京の満員電車でも問題なく通勤することができた。

また、子連れ出勤をするようになって、自然と様々な人と挨拶を交わしたり、混雑している電車で座席を譲られたりするようになった。一人で会社を往復していた頃と比べると、社会との関わりを感じる機会が増えたので、子連れ出勤も大変なことばかりではないかなと考えるようになった。

3 育児に関わって感じたこと

① 男性の育児休業は想定範囲外？

実際に育児休業を取得してみて強く感じたのは、育児休業制度自体はあるものの、男性が取得した事例が社内・社外とも非常に乏しいことである。育休の取得に向けた準備をしても、経験に基づく判断ができないため、上司を始めとする上層部、さらには人事部署まで巻き込んで、ゼロから議論が必要になることが何度もあった。

それは会社だけでなく、行政も同様で、離乳食教室へ参加しようとしたら、授乳中の方もいるので女性限定ですと断られることもあった。

社会の中で、男性の育児休業が想定範囲内になるにはまだ時間がかかるのかなと感じることが多かった。

② 妻へのサポートの重要性

育児休業中は、目の前の育児に一喜一憂し、育児に主体的に関わるという事実に対して満足しがちであったが、産前・産後、大変な時期の妻へのサポートもしっかりする必要があったと反省するばかりである。

③ 地域社会とのかかわり

子供が6カ月を過ぎると、子連れの外出も増えてくるようになり、自分の社会を見る目が明らかに変わってきた。ベビーカーの利用のしやすさ、オムツ替えの場所、喫煙場所の回避、外出先でのミルクや食事など、外出時の様々な制約が自然と気になるようになった。そして、児童館、小児科等、これまで場所すら知らなかった施設で、他の保護者さん達と積極的に会話するようになった。

私自身、公共事業に携わる仕事をしていたが、育児を機に地域社会との関わりが増えることにより、視野が広がり、今後の仕事にはプラスに働くものと考えている。

④ 育児情報のアップデートの重要性

出産から育児に至る過程で、いろんな先輩方に相談し、勉強させていただいた。そこで感じたことは、出産・育児に関する制度や社会情勢は、時代とともに大きく変化していることである。

私自身の育児は2017年に始まったが、その

後も制度は変わっている。育児の悩みについて、ある瞬間の情報で考え、判断するのではなく、継続的に情報を収集し、古い情報を取捨選択することが育児においては重要であると感じている。

4 おわりに ～ 自分自身への提案

育児経験2年程の私が提案するのは少々おこがましいが、いずれ育児が終り、若い人の育児を応援する立場になっていくと思う。その時までこう変えていきたい、という自分自身と社会の姿をここで提案しておきたい。

それは、「出産と育児を『おめでとう』と言える社会」である。何を当たり前のことと思われるかもしれないが、実際に男性が、上司や同僚、取引先に対して、しっかりと育児に関わると宣言する際、最初に返ってくるのは、「えっ…」という反応が非常に多い。そして、「奥さんは仕事が忙しいのか?」「両親は手伝えないのか?」と矢継ぎ早に質問される。

ただでさえ人手不足の業界なので、脊髓反射的にそう考えてしまう気持ちも十分に理解できるが、その前に、笑顔で「おめでとう! 大変だけど周りもサポートするからね」と子供の誕生を祝うことができる組織・社会を作っていきたいと思う。



写真1 子連れ出勤の筆者

<男女共同参画推進委員会より>

「子連れ出勤は仕事にプラスになった」

なんて素敵な言葉でしょう。多くの方に語っていただきたいと思います。異動先の名古屋でもご活躍を。

志俣 和宏 (しだわら かずひろ)

技術士(建設/環境/応用理学/
総合技術監理部門)

日本工営(株)
名古屋支店 技術部
e-mail: a4796@n-koei.co.jp

